

ベトナムにおける近年の日本研究の状況とその特徴

NGUYEN Tien Luc

はじめに

ベトナムの「ドイモイ」政策開始（1986年）以来、約20年間に渡ってベトナムと日本の関係は迅速に、そして多様に進展してきた。それにつれてベトナムにおける日本研究は、各分野で躍進的に発展し、一定の成果をあげてきた。また、日本研究・日本語教育機関および日本研究者も増えつつある。

しかし、ベトナムの日本研究は、日本の経済分野、歴史・政治分野に集中しており、日本の文学・文化に関する研究業績は少ないと言えよう。

加えて、ベトナムの日本研究における国内研究機関の協力は、まだ緊密なものとはなっておらず、国際的共同研究も少ない状況にある。

さらに、ベトナムの日本研究者はこれまで研究業績を幾つも発表してきてはいたが、日本語文献・一次資料利用研究が少なく、他の言語（英語・ロシア語）で書かれた二次資料を利用した研究が多い。結果として、ベトナムで著名な日本研究者はまだ生まれていない。

本研究で筆者は、ベトナムにおける近年の日本研究の状況を紹介し、その特徴を分析した上で、ベトナムの日本研究を量的にも質的にも発展させるために、今後の課題を提示したい。

1. ベトナムにおける近年の日本研究の状況

1.1 ベトナムにおける日本研究・日本語教育機関

近年、ベトナムと日本の関係は政治・経済・市民交流など各分野で進展しており、それに連れてベトナムにおける日本研究・日本語教育機関が毎年増加している。

ベトナムにおける主な日本研究機関は、1993年に設立された国立日本研究センターと1994年に開設されたハノイ国家大学日本学科、ホーチミン大学日本学科である¹⁾。その他、各大学の日本語学科が日本語教育を中心にしながら、日本語・日本語教育・日本文化などの研究に取り組んでいる。

首都ハノイにおいては、国立大学4校（ハノイ国家大学外国語大学東洋言語・文化学科、ハノイ国家大学人文・社会科学大学東洋学部日本学科、ハノイ大学日本語学科とハノイ貿易大学日本語学科）と私立大学2校（ドンド大学日本語学科、タンロン大学日本語学科）において日本語教育が行われており、日本語運用力の高い教員が多数在籍している。

ホーチミンにおいては、国立大学3校（ホーチミン国家大学人文・社会科学大学東洋学部日本学科、ホーチミン師範大学日本語学科、ハノイ貿易大学ホーチミン分校日本語学科）、私立大

学6校（ホーチミン外国語・情報大学東洋学部日学科，フンヴォン大学日本語学科，ホンバン大学日本語学科，ヴァンヒエン大学東洋学部日学科）がある。ホーチミン近郊においては，ラクホン大学東洋学部日学科，バリア・ヴァンタウ大学東洋学部日学科でも日本語教育を行っている。

ベトナム中部においても，近年日本語学科が次々に設立された。例えば，フエ大学外国語大学日本語学科，ダナン大学外国語大学日学科が3年前に日本語教育を開始しており，これらの大学では第一外国語として日本語を教育している²⁾。

また，一般社会人向けに日本語教育を行っている機関として，民間日本語学校と大学付属外国語センターがハノイには8機関ある。しかし，ホーチミンには2008年現在，40機関以上があると言われている。それ以外に私塾，企業内教育も多数存在する。

日本語学習者に関しては，国際交流基金実施の1998年度調査において，ベトナム全土の日本語学習者が約1万人と推計された。その内，30%（約3,000人）が首都ハノイ，70%（約7,000人）がホーチミン市および近郊の日本語学習者である。その後も，ホーチミン市における日本語学習者は増加の一途を辿り，2003年3月時点では，ホーチミン市内だけでも約1万人が日本語を学習しているとみられている。一方，ハノイにおける日本語学習者数も4,000名を越えている。昨年2008年における全国の日本語学習者は，約3万人に上ると推定されている。その中でハノイを中心とする北ベトナムにおいては1万2千名，ホーチミン市を中心とする南ベトナムにおいては1万8千名が日本語学校に通っている³⁾。

日本研究所は1993年に開設され，機関誌『日本研究』を発行して年に4号を出している。この研究所には主に経済学者が多いため，『日本研究』には日本経済の論文が多いという特徴を持っている。続いて近年開設されたホーチミン国家大学日本研究センターは，日本の歴史，日越関係の全般にわたる研究論文を次々に発表している。

1. 2 日本研究状況

1. 2. 1 日本の経済研究

ベトナムでは，「ドイモイ」政策をとって市場経済への道を歩んでいるため，世界第二の経済大国である日本の経済には価値があり，ベトナムにとって良い参考になり得ると評価されている。ゆえに日本経済研究が積極的に促進されている。その結果，日本研究の各分野の中でも，日本経済研究が最も進んできた。

1980年代後半には日本経済に関する翻訳書が圧倒的な量を占めたが，1990年代に入ると，ベトナムの日本経済研究者は独自の研究を行ってきた。早くもLe Van SangとLuu Ngoc Trinhの両氏は，『日本—世界経済大国への道を』（社会科学出版社，1991年）で日本の高度経済成長時代を論じた。Luu Ngoc Trinh氏はさらに日本の経済史を論じ，『日本経済：歴史における興盛と衰退』を統計出版社から1998年に発行した。

Nguyen Duy Dung氏は日本の経済成長から発生した社会諸問題に取り組んでいた。同氏は『日本の福祉問題への解決策』（社会科学出版社，1998年）と『直面している諸問題の解決—日本の

経験』(ハノイ出版社, 2007年)の研究書2冊を出版した。同じく, Le Van Sang と Kim Ngoc の両氏は, 『経済高度成長期の経済成長と社会公平のバランスーベトナムへの教訓』を研究し, 国家政治出版社 から 1999 年に発表した。

一方, Vu Van Ha 氏は 日越経済関係の研究に集中し, 2000 年には『1990 年代の日越経済関係とその展望』を書いて, 社会科学出版社から出版した。なお, Ngo Xuan Binh 氏は『北東アジアにおける主要経済国の発展傾向』(ハノイ出版社, 2007年)を検討する際, 日本の経済発展の傾向を解明していた。

それらとともに, ベトナムの日本経済研究者は各学術雑誌(『日本研究』・『日本・北東アジア研究』・『経済研究』・『世界経済』・『アジア太平洋経済』・『国際問題研究』など)に数百本の論文を発表している。その中には Le Van Sang, Luu Ngoc Trinh, Nguyen Duy Dung, Ngo Xuan Binh, Tran Anh Phuong, Vu Van Ha 各氏の優れた論文があり, 日本経済そのものや日本の国際的経済関係, あるいは日本とベトナムの経済関係を多面的に研究したものがある。

1. 2. 2 日本史の研究

ベトナムと日本は古くから歴史的・文化的に深く関わっていたにも関わらず, ベトナムにおける本格的な日本研究が始まったのは東南アジアの国々と比べても少し遅れている⁴⁾。1986 年以降のベトナムのドイモイ, 特に 1992 年の日本の対ベトナム経済援助再開以来, 日本に対する学問的関心の高まりとともに日本史研究も活気を帯び始めた。1980 年代まで行なわれていた日本史の研究は, 日仏共同統治下のインドシナにおける日越関係に関する研究が主流をなしていた。1990 年代に入って, 両国関係が緊密となり日本に対する関心が急激に強まるとともに, 日本史専攻の研究者も増加し, 日本史全般・日本史そのものの研究が盛んとなってきた。中でも主要な著書として, Phan Ngoc Lien 氏の編集による『日本の歴史』(文化通信出版社, 1995年(2002年第2版)), Le Van Quang 氏の手記『日本史』(ホーチミン国家大学, 1998年), Nguyen Quoc Hung 氏が編集した『日本の歴史』(世界出版社, 2007年)などがある。それぞれの著作は, 冷戦前のベトナムにおける日本史観と欧米の日本史観を結合しながら形成された日本史全般にわたる理論を基軸として書かれたものである。

また, 日本史に関する個別的なテーマを集中的に研究した研究者もいる。Phan Hai Linh 氏は長期にわたって日本の荘園を研究していた。同氏は 2003 年に『日本の荘園史』を世界出版社から発行している。Nguyen Van Kim 氏は近世における日本とアジアの関わりについて, 一連の論文を『歴史研究』に投稿していた。その後, 同氏はそれらの論文を編集し, 2冊の専門書(『XV-XVII 世紀における日本と東南アジア関係史』/『日本とアジア—歴史のかかわりと経済変動』いずれも 2003年 ハノイ国家大学出版社)として発行した。Trinh Tien Thuan 氏は 16 - 17 世紀における越日関係史に関する一連の論文を発表していた。一方, Nguyen Tien Luc 氏は日本留学時代から近現代の日本史, ベトナム・日本関係史の研究を続けていた。帰国してから同氏はベトナム・日本関係に関する国際シンポジウムの開催に力を入れ, 発表した論文を編集し, 2003 年に『東アジアと東南アジア世界の中の日本』, 2004 年に『ベトナム・日本関係: 成果と展望』を

ホーチミン出版社から出版した。同氏は昨年2008年には、『在日期のファン・ボイ・チャウ活動』という専門書をホーチミン国家大学出版社より出版している。Hoang Thi Minh Hoa氏は戦後日本の改革を集中に論じて、そのテーマを1冊の専門書にまとめた（『戦後日本改革：1945—1951年』社会科学出版社、1999年）。Mai Phu Phuong氏は戦後越日関係史、特に戦後賠償問題に取り組んでいた。

さらに、1990年からほぼ毎年、ベトナム・日本関係に携わるベトナムの日本研究者と日本人学者の協力で国際シンポジウムが開催されてきた。その結果、1990年の『ホイアン古い町』、1992年の『フォヒエン古い町』、1998年の『ベトナム・日本国交樹立25周年』、2002年の『近世日本町と陶磁器 日越交流史』（2002、柏出版社）、2003年の『ベトナム・日本国交樹立30周年』などの成果が次々に出版された。

しかしながら、以上に述べたようなベトナムにおける日本史研究は、幾つもの業績があったにも関わらず近現代史に集中されており、古代・中世史研究が他の時代より弱かったのは事実である⁵⁾。また、ベトナムの日本史研究は日本史自体の研究より関係史、特にベトナム・日本関係史の研究を重視し、日本史を独立のものとして理解しようとする研究が不足している点も指摘されている。さらに、一般日本史と越日関係史に集中しており、経済史・社会史・思想史などに関する研究がまだまだ少ないということも言わなければいけない。

1. 2. 3 日本文化・文学研究

日本文化・文学の分野でも、1990年代以降に本格的な研究が行なわれた。しかし、その以前に日本文化・文学研究に関する関心が持たれなかったわけではない。以前の南ベトナムにおける日本文化・文学を紹介・研究する著書・論文が複数出版されている。

日本文化に関する研究としては、Huu Ngoc氏が『「日の丸」国の文化像』（世界出版社、1993年）、『桜と電子』（文化出版社、1994年）などで日本文化の美しさ・深さ・調和性を論じている。Ho Hoang Hoa氏は『日本の文化発達史』（社会科学出版社、2001）、『日本における文化財保存事業』（社会科学出版社、2004年）を発表している。また、Ngo Minh ThuyとNgo Tu Lapの両氏は『日本：国土・人々・文学』（通信文化出版社、2003年）、Ly Kim Hoa氏は『日本文化探求』（ホーチミン出版社、2006年）で日本の文化を紹介した。Nhat Chieu氏は『鏡から見た日本文化』を教育出版社から発表している。

日本の信仰に関する研究として日本の神道・仏教を中心とする日本宗教を取り上げていたTran Van Trinh氏は近年、『日本宗教』（国家政治出版社、2006年）という著書を発表した。また、日本の文化に関する紹介を行う論文・記事は文芸誌・文化誌や新聞などに数多く掲載されている。

日本文化研究の傾向の中で、伝統文化に対する関心が現代文化に比べて高い比重を占めているのが興味深い。日本のポップ文化はベトナムに広く普及されてきたが、ベトナムでのポップ文化研究は未だなされていない状況である。また、ベトナムでの日本文化研究における大きな特徴のもう一つは日本経営文化に対する関心が高いことで、この分野では欧米の著書から翻訳

された本が多く、ベトナム人研究者の書いた本がほとんどないということである⁶⁾。

日本文学研究に関してはNhat Chieu氏が早くも近世の日本文学に注目していた。1994年に、『芭蕉と俳句』を文学出版社から発表し、1998年に『日本の詩歌』も教育出版社から出版していたが、2001年には『日本文学—上古から1868年まで—』という文学史を書いた。Nguyen Bich Ha氏は『日本古伝集』（ハノイ国家出版社、1999）を発表した。Le Tu HienとLuu Duc Trungの両氏も俳句に関心を持って『俳句：花と時間』（教育出版社、2007年）という本を発表した。

Ha Van Luong氏の研究によれば、俳句と芭蕉に関する数十論文が学術雑誌や文芸雑誌に掲載されている。例えば、Dao Thai Thuan氏が「芭蕉の俳句に禅宗の跡」を『文化』に、Nguyen Tuan Khanh氏が「松尾芭蕉—俳句の詩人」を『日本研究』に、Phan Nhat Chieu氏が「芭蕉、俳句道」を『現代知識』に、Dao Thi Thu Hang氏が「学校教育における芭蕉の詩」を『日本・北東アジア研究』に、Ha Van Luong氏も「日本の俳句の特徴」を『日本・北東アジア研究』にそれぞれ掲載している。

一方、近現代の日本文学に関しては、川端康成が集中的に研究されており、Luu Duc Trung氏の単行本『川端康成 生涯と作品』（教育出版社、1997）が出版されている。Dao Thi Thu Hang氏もまた、『日本文化と川端康成』（教育出版社、2007）を発行している。

また、ベトナム・日本の比較文学に早くから関心をみせているDoan Le Giang氏は「ベトナム・日本文学の観念についての比較研究」を1997年に、「ベトナム・中国・日本文学の新観念について」を1998年に『文学研究』で発表している。比較文学はベトナム・日本文学の関係を深く理解することでもあり、若い研究者たちにその推進を期待する分野といえる。Tran Hai Yen氏は「日本文学の特徴」を『日本研究』に1999年に発表している。

1. 2. 4 日本語研究

以上に述べたように、近年ベトナム全土で日本語学習者が躍進的に増えているが、日本語研究は非常に少ない。全国においても日本語研究者は数人しかいない。Nguyen Thi Bich Ha氏は『日本語・ベトナム語における経済・ビジネス述語の構造の比較研究』という博士論文を提出したが、日本語自体の研究はされていない。それに対してNguyen Thi Viet Thanh氏は『言語雑誌』・『日本研究』などに一連の論文を発表して日本の文字語彙から文法、音節までを論じている。同氏は2000年に『日本語文法』を単行本として発行した。Tran Thi Chung Toan氏は、日本語の動詞を集中的に研究している。

しかし、近年、日本留学から戻ってきた日本語研究者や修士課程で日本語研究のテーマをとっている大学院生が毎年のように増えている。彼らが研究しているテーマは日本語文法と日本語史に関するものが多い。その中では、日本語とベトナム語の形態的対照研究が多い傾向にある。その他にも音声・音韻・文字・表記・語彙・用語・文章・談話・文体など様々な方面にわたって研究が行なわれている。また今年、ハノイ大学日本語学科とハノイ国家大学外国語大学に日本語専攻を開設する計画があるが、それは日本語研究が一層進んでいく好機であると言えよう。

このように、日本語研究にはますます拡大する傾向がみられる。

2. ベトナムにおける日本研究の特徴

ベトナムにおける日本研究の特徴は次のように概括できる。

第一に、ベトナムの「ドイモイ」政策開始（1986年）以来20年間、ベトナム・日本関係は迅速的・多樣的に進展しており、それにつれてベトナムにおける日本研究は、量的においても躍進的に発展し、質的においても一定の成果を取め、改善されつつある。それとともに、日本研究・日本語教育機関と日本研究者も増えていくと見られる。

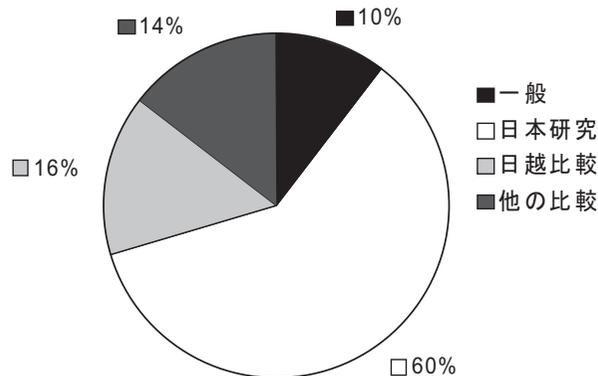


図1：ベトナムにおける日本研究の傾向

出典：Nguyen Van Kim-Nguyen Manh Dung の論文（2006）により作成。

図1を見ると、ベトナムの日本研究の傾向は一般研究と比較研究よりも日本自体の研究が圧倒的に多いということがわかる。

第二に、ベトナムの日本研究は日本の経済分野、歴史・政治分野に集中されており、日本の文学・文化に関する研究業績は少ないと言えよう。なぜなら、ベトナムの日本研究者の多くは経済学者と歴史学者であるからである。また、ベトナム政府から日本の経済発展の秘密や日本の歴史理解を把握するよう研究者に要請があったからでもある。さらに、日本研究センターには経済学者が多いために日本経済を集中的に研究しているが、大学には歴史学者が多いために日本の歴史・政治の研究が盛んになっている。それが「経：院，史：校」（経済研究は研究所で、歴史研究は大学で）という現象となることは不思議ではない⁷⁾。

第三に、ベトナムの日本研究機関同士の研究協力は、まだ緊密になされていない。特に日本研究センターと各大学日本学科との共同研究・協力研究はほとんどされていない。また、日本人研究者との国際的共同研究もまだ少ない。この10年、ハノイ国家大学と日本の幾つかの大学との共同研究は行われてきたが、他の大学・研究機関と日本側の大学・研究機関との共同研究は行われていないという事実がある。

第四にベトナムの日本研究者は研究業績を出してはきたが、量的に多いとはいえない。現在でもベトナムの日本研究者による日本語文献・一次資料利用研究は少なく、他の言語（英語・

ロシア語)で書かれた二次資料利用研究が多い。厳密な意味での研究論文はまだ少ない状況であると言えよう。研究者の多くが日本語文献を利用できないことは、研究業績の制限をもたらしている。結果として、ベトナムで著名な日本研究者はまだ生まれていない。

3. 日本研究の今後の課題

ベトナム・日本両国は親近感を持っており、特に歴史と文化を共有する部分が多いので、日本をより良く研究できるような条件を調整する必要があると思う。

そのためには第一に、ベトナムにおける日本研究の環境を整えなければならない。日本の特定分野を集中的に研究するのではなく、すべての分野で研究を行わなければいけない。また、すべての分野で国際的レベルの日本研究に寄与するよう、高い水準に達する努力をしなければならない。

第二に、本格的な日本研究者の養成を重視すべきである。外国研究者の養成のように、まず研究者各自は日本語を身につけなければならない。日本語ができない者は日本研究者になれない時期に来ていると言える。研究には一次資料を積極的に利用し、様々な視点から結合することによって研究を行うべきである。

第三に、日本政府・研究助成財団・日本国際交流基金などの援助を積極的に受けながら、日本の研究者や東南アジアの日本研究者との国際シンポジウム、共同研究に主体的に参加し、日本研究の強化を試みる姿勢を表す必要がある。

21世紀のベトナムの日本研究は両国関係が緊密となるとともに必ず発展していくと言えるだろう。

注

- 1) 1990年代におけるベトナムにおいて日本学科は次々と設立されたが、本格的な日本研究機関はこの三つの機関だと思われる。
- 2) フェ・ダナン大学日本語学科の設立およびその活動については、Nguyen Thi Huong Tra「フェ外国語大学における日本語及び日本文化教育の現状」、Tang Thanh Mai「ダナン外国語大学における日本文化の扱い—学内外での取り組み」(いずれも『ベトナムの日本語教育における日本文化の扱い』国際シンポジウム、ホイアン2009年8月16)を参照。
- 3) 在ホーチミン日本国総領事館総領事水城幾雄の基調講演、「日本・南ベトナム関係：過去・現在・未来」(ホーチミン2008, 15頁)。
- 4) ベトナムにおける日本史研究がいつから始まったのかは正確に分からないが、20世紀初頭に日本に滞在していたベトナム民族運動指導者ファン・ボイ・チャウ(Phan Boi Chau)の日本関連記述からではないかと私は考える。しかし、日本研究を本格的に開始したのは1986年のドイモイ(刷新)以降だと考えられる。
- 5) Nguyen Van KimとNguyen Manh Dungの論文では、ベトナムにおける日本史研究論文数の中で、近

現代史研究の論文数が90%強を占めていると指摘されている。Nguyen Van Kim・Nguyen Manh Dung「ベトナムにおける日本研究：特徴と傾向」（『日越文化・教育関係と100周年ドンズ運動』ハノイ国家大学、2006年、186頁）を参照。

- 6) ベトナムにおける日本文化研究論文数に関して、Nguyen Van Kim と Nguyen Manh Dung の論文（2006年）と Pham Hong Thai の論文（2008年）によると、日本研究全体のそれぞれ15.4%と25.1%を占めている。しかし、両者も「文化」分野のみの統計ではなく、それぞれ「文化・芸術」、「文化・教育」の統計であるからその比重はさらに高くなると思われる。また、日本文化研究論文の中では、「研究論文」よりも「紹介論文」の方が多い。Nguyen Van Kim と Nguyen Manh Dung の論文は上記のものを参照。Pham Hong Thai の論文は「ベトナムの日本研究における『東アジア研究』雑誌の役割について」（『ベトナムにおける日本研究促進に向けて』国際シンポジウム紀要、ハノイ国家大学、2008、84頁）を参照。
- 7) 私が提起した「経：院，校：史」という言葉は学術的には成熟した用語ではないが、研究者・研究業績が集中している研究機関から見れば、ベトナムにおける日本研究は「経：院，校：史」という現象を示している。

参考文献

- 『ベトナムにおける日本研究促進に向けて』、国際シンポジウム紀要、ハノイ国家大学、2008
- Ha Van Luong 「ベトナムにおける日本文学の翻訳・研究の状況」（『北東アジア・日本研究』2007）
- Ho Hoang Hoa-Phan Hai Linh・Nguyen Tien Luc, 2007, Japanese Studies and Human Resource Training for Japanese Studies in Vietnam
- 木村汎・グエン・ズイ・ズン・古田元夫『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』世界思想社、2000
- Nguyen Tien Luc 「ベトナムにおける最近10年の日本研究の状況」（『二十一世紀を向ける人文・社会科学』ホーチミン出版社、2001）
- Nguyen Tien Luc 「ベトナムにおける最近の日本研究の状況（2000 - 2007年）」（『グローバル時代の日越関係』ホーチミン、2007）
- Nguyen Van Kim・Nguyen Manh Dung 「ベトナムにおける日本研究：特徴と傾向」（『日越文化・教育関係と100周年ドンズ運動』ハノイ国家大学出版社、2006）
- 嶋尾 稔「日本におけるベトナム研究の再考」（『日越文化・教育関係と100周年ドンズ運動』、ハノイ国家大学出版社、2006）